

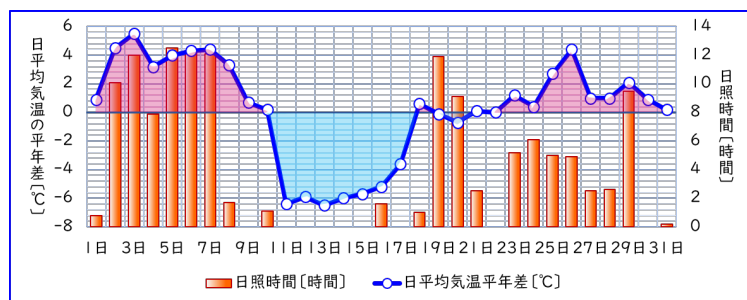
CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. オホーツク海高気圧
2. 空梅雨 ～梅雨で雨が少なくても大変！～
3. お天気よもやま話 ～気象に関することわざ

1 オホーツク海高気圧

オホーツク海高気圧は冬季のシベリア高気圧、夏季の太平洋高気圧と並んで、日本付近に現れる代表的な高気圧です。特に、梅雨の頃に現れるとされていますが、実は梅雨の頃だけではなく、秋、台風シーズンが終わる頃まで現れ、時には盛夏期にオホーツク海方面に居座ることもあります。ただ、シベリア高気圧や太平洋高気圧のように、毎年、季節の変化とともに同じような場所に現れる定常性はありません。気象の本などでは太平洋高気圧と並んで梅雨の主役のひとつとされていますが、オホーツク海高気圧は現れることもあれば、全く現れないこともあるため、主役不在も珍しいことではありません。例えば月平均海面気圧の分布などではオホーツク海に高気圧は見られません。オホーツク海高気圧は北半球の上空を西から東に流れる偏西風が梅雨の時期以降、日本の北で南北に蛇行して、オホーツク海方面に気圧の尾根が形成されるとそれに対応するようにオホーツク海高気圧が現れます。このため、定常性はありませんが、梅雨から夏の頃にオホーツク海高気圧が現れると、北海道や東北地方の太平洋側の地方では低温や日照不足になることがあります。そのような状態が長く続くと冷害につながります。右上の図は2021年8月の岩手県宮古の日平均気温の平年差と日照時間の経過です。上旬は太平洋高気圧の勢力が強く、毎日暑い晴天が続いていましたが、中旬



に入るとオホーツク海高気圧が現れ、毎日曇天が続き、気温も極端に低くなりました。オホーツク海高気圧は北日本の低温と結びつけられるため、冷たい空気に満たされた高気圧との印象がありますが、立体的に見ると冷たいのは下層だけで、中・上層はむしろ周囲より暖かい空気できています。オホーツク海は8月でも海面水温は15℃以下、千島列島から北海道の東の海上でも20℃以下の冷たい海が広がっています。オホーツク海高気圧が現れると、高気圧から吹き出す風がこの冷たい海面の上を移動してくため気温があがらず、海面からの水蒸気の補給を受けて、低温や日照不足をもたらすのです。特に北日本の太平洋側の地方ではこれからの季節、オホーツク海高気圧の出現にも目を向けておく必要があります。



2 空梅雨 ～梅雨で雨が少なくても大変！～

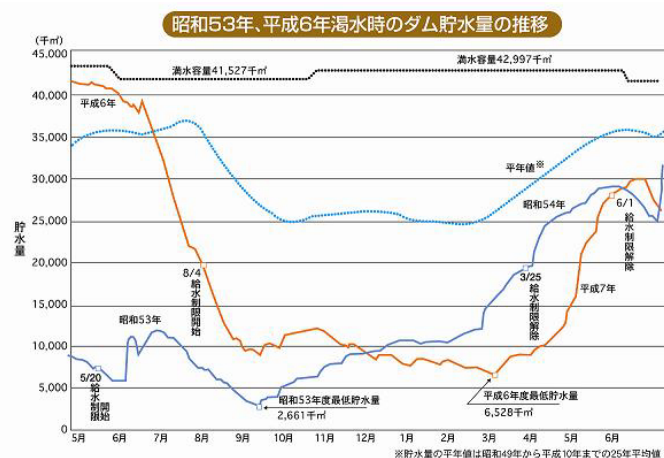
平年で見ますと、日本の梅雨は5月上旬に南西諸島から梅雨入りし、7月下旬にかけて東北地方が梅雨明けするまで続きます。梅雨の後半の6月終わりから7月にかけての梅雨末期と言われる頃には梅雨前線の活動が活発になり、集中豪雨が発生して、大きな被害が出ることもあります。このため梅雨と言えば「大雨」がイメージされるのです。

ところで、時には梅雨の期間が非常に短かったり、梅雨期間にほとんど雨が降らなかったりすることがあります。この状態になった時を「空梅雨（からつゆ）」と言います。

空梅雨の要因のひとつ目は、オホーツク海高気圧が弱く太平洋高気圧が強い場合で、梅雨前線が日本付近に停滞せずに夏の気圧配置となるケースです。もう一つの要因は、逆に太平洋高気圧が弱い場合で、前線が南下して大陸の高気圧に覆われることが多くなるケースです。

空梅雨は、雨が少ないので大雨による災害は少なくなるので良いのかと言えばそうではなく、違うところに大きな影響が出る場合があります。一つは、農業分野です。梅雨期間に雨が少ないとダムの貯水量が少なくなって農業用水に影響が出ます。農業だけでなく、実は私たちの生活にも大きな影響が出ます。最近では少ないですが、空梅雨になる

と給水制限（断水等）が行われることがあります。福岡市では、昭和53年と平成6年に大渇水を経験しています。いずれの年も1年近くにわたって給水制限が行われました。昭和53年にはピーク時は1日のうち実に19時間も断水し、平成6年には12時間断水したそうです。空梅雨の時は、天気が良くて高温の状況もあるので、渇水と高温障害の両方の影響もありそうです。雨が降らなくても大きな影響があるので、ほどこに降ってほしいものです。



出典：福岡市水道局

3 お天気よもやま話 ～気象に関することわざ

「夕焼けは晴れ」は夕焼けの翌日は晴れるということですが、子供の頃から良く耳にした言葉でしょう。気象に関することわざや言い伝えは各地の生活や文化、自然に根ざしたものとして数多く伝えられています。現代のように気象の予測技術が向上し、天気に関する様々な情報が溢れている時代にあっても天気に関することわざの重要性は失われてきているのかもしれませんが。

一方で、気象のことわざの中には気象災害に関わることも数多くあります。気象庁のOBで農学博士であった大後美保さんが40年前に著した本に『災害予知ことわざ辞典』があります。雨や風、雪や海の様子など全国各地の災害につながるような言い伝えを集めたもので、その数は1200を超えています。この本を読んでみると、いくつかの特徴があります。例えば、農業と漁業に関わるもの、鳥や虫、植物など身近な生き物に関わるもの、地元の祭りや行事など季節と天気との関係性を表したものが多くです。また、表現は異なっていますが類似の言い伝えが各地にあり、

昔からの生活に深く根ざしたものが、命や生活を守るための教訓として伝えられていることがわかります。

中には現代の気象学の視点からは科学的な根拠がはっきりしないものもある一方、防災の視点からは現代においても活かすべきものがあります。「朝の雷は大洪水のまえぶれ」「九月の東風は大荒れとなる」などは東日本から西日本の各地で伝えられています。日中になって気温が上がる前の朝から雷が鳴るのは大気の状態が不安定であり、激しい雨となる可能性が普段より高くなっている状況です。また秋9月の東寄りの風は、南海上からの台風の北上、接近を予想させるものです。これらの言い伝え、ことわざは少ない字数、平易な言葉で表され、大人だけではなく、子どもにも容易に理解できるものも多く、まさに人々の生活の中で活かされてきたものです。現在ではこうした言い伝えやことわざに頼って即時的な防災対応を行うことはないでしょうが、その地方の気象や災害の特性を知る貴重な手がかりとなるものです。古くからの地元の知恵を活かすことも“防災”へのアプローチのひとつでしょう。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号
http://www.npo-cemi.com/center.html

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

